

## 青少年による里づくり活動の展望

山形県内陸北部の戸沢村角川で、農山村の地域づくり活動にかかわりはじめて5年になる。活動の主体となる地域運営学校「角川里の自然環境学校」は、今まで角川での活動がほとんどだったが、今年是要請を受けて近隣の市町村に出かけることも多くなった。それだけ角川で行われている里の自然や文化を生かした住民による教育プログラムや地域づくり活動が着目されているのだろう。そしてこの取り組みが一地域を越えた普遍性を持ったものでもあるのだろうと思う。

角川における里の自然や文化を活かした取り組みは、地元のおじいちゃんやおばあちゃん、おじちゃんやおばちゃんたちによる手作りで行われている。だが、これらの活動の最終目標は、子ども達や若者達に、里の智恵や技術を伝承し、それを活かして彼らが地域で暮らしていけるような環境や産業を育成していくということにある。つまり青少年たちに向けた活動なのだ。だから、角川の里では活動が始まった当初から多くの青少年たちが参加者として、あるいはサポートスタッフとしてかかわってきた。

戸沢村には高校がない。中学校を卒業すると子ども達は近隣の都市部の高校へ進学する。その後、さらに遠方の専門学校や大学へ行ってしまうというのが通例だ。子ども達は徐々に地域から遠ざかっていく。しかし、活動を始めて5年目の今年、この動きに少し変化が見られるようになった。

多忙な高校生活を送りながら時間を見つけて活動に参加してくる高校生達が多くなってきた。また、他の市町村での活動の際には、その近くにある大学に進学した地元の学生がサポートスタッフとして手伝いに来てくれる。学生だけではなく、もう社会人になった若者もサポーターで活動に参加してくれる。学業を終えて集落に戻ってくる若者たちも徐々に増えてきた。先日も海辺の集落との交流事業の際、角川出身の学生や今年社会人になった若者がサポーターとしてきてくれた。また、角川の若者達だけではなくその友人達も活動に興味を持って参加してくれる。このように様々な立場と場所から、地元はもとより幅広い場所で地域づくり活動に青少年たちがかかわりはじめているのである。

彼らに共通しているのは、この5年間の角川の里での活動の経験を踏まえて、里独自の「よさ」に気づきはじめ、里の自然や文化を活かした手作りの活動を地域の人々とともに楽しみながら実践していこうとしていることだ。さらにこ

の活動の延長線上で将来の仕事をしていきたいと真剣に考えはじめているように見える。

だが、こうした彼らの自己実現の願いを達成するには課題も多く残っている。大きな問題は、これらの活動がまだまだ若者達が担える地域産業にまで育成されていないことだ。また、地域づくりが地域産業作りへと移行していく過程で今度は集落内での人間関係の難しさ、いわゆる地域の「しがらみ」「やっかみ」、悪意を持った「うわさ」などが出てくる。現段階では彼らの家族の理解を得るのが難しいという声も聞かれる。こうした経済面と地域や家庭の人間関係からくるストレスが青少年たちに里の地域づくりに身を投じることを結果的に躊躇させてしまう。

こうした状況を踏まえて、角川里の自然環境学校では、青少年たちへのより広域での里の自然文化を活かした教育や活動をサポートするために独自組織「里の自然文化共育研究所」を発足することになった。従来の活動に新たなアイデアを盛り込みながら課題を解決し活動の新展開を模索し、青少年と地域住民双方が学びつつ共に育つことを目指す。そこには上述した田舎特有のまなざしにさらされ悪意を持った誤解に立ち向かわなければならないというリスクも伴う。まだその成果は未知数ではある。だが、青少年たちと活動していく中で、今新たな里づくりに向けて動き出さなければならない段階にきているのである。